
黄色い丘

米沢 祥一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黄色い丘

【NZコード】

N4431C

【作者名】

米沢 祥一

【あらすじ】

近しい未来、終末戦争の末核の冬が起つり、人類は脱出を余儀なくされる。

簡易防護服のバイザーを通して雪ははつきりと見えた。ゆらりゆらりと、灰が積もるように落ちてくる。純白というには程遠くほんとど黒に近いから、オレンジのアクリル板を通すと妙な色に見えた。防護措置なしでは数分で被爆危険域に達する不毛な地上、足元の石を蹴とばすと黄色い砂塵がぶわっと舞い上がる。厭わしいけれど、何だか懐かしくもあった。

成田宇宙港では最後の旅客船、かんなぎ号が発進準備をしている。今は気密試験中だが、これが地表を離れれば地球人類は文字通り消滅することになる。私は最後の乗り組みという訳だ。我々は青い清純な、青く清純だった星を捨てて月に行く。

最後に私は街の跡を歩いていた。幸い時間はまだあるのだ。割れた窓、フロントガラスのない車。ビルは焼け焦げてはいたが、遠目には全く健在である。いや、この街そのものが生きているのに死んでいる。振り返れば私の足跡だけがぽつんぽつんと確かに見える。それもすぐに黒い雪に埋もれ、消されるのだろう。背筋が寒くなつた。小走りになつた。

かんなぎ号が地響きを發して加速する。ジェットエンジンの氣流が滑走路の砂や灰をひどく巻き上げた。ああ、あれじゃ付近の住人は怒るな、うるさい、埃がひどいって。そんな的外れなことを考えた。

後ろを見ないよう走っていたら、いつの間にか家に着いた。屋根や庭が埋もれてなくなっている以外は特に異常はない。ガラスも少し汚れているがヒビも入っていない。扉には鍵が掛かっていて、少し可笑しかつた。打ち破つて中に入る。冷蔵庫の中身は腐つているだろう。書斎に行つて本を持ち出す。それ以外に用はない。

暗いな、暗いな。もう青空は見られないんだろうか。

元来た道を走つて戻る。足跡はもう消えかかっていたが、なんと

かなる。持ち出した本が汚れないようにしなければ、どうしてこんなに静かなんだ。

下を見れば、枯葉色の大地が広がっていた。子供のときの記憶では緑だったと思う。雲も薄汚れていて美しいとはとても言えない。だけど海だけは、今観ている地図帳のようこそじしまでも青かった。

(後書き)

これはSFなのか？ 小説などまともに書いたことのない私の処女作。感想・批判など頂けると大変ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4431c/>

黄色い丘

2011年1月3日23時32分発行